

吐蕃の長安侵入について

佐藤長

一

天寶十四載（七五五）に起つた安祿山の亂は大唐帝國の基礎を根底から搖がし、新しい社會への道を開いたものとして東洋史上重要な意味をもつものとされている。しかし一方混亂に陥つた帝國體制の間隙に乘じ、西北方面の諸民族は種種な形で帝國の周邊に活動し、後の塞外異民族發展の先驅をなした點についてもこの亂は重要な意義をもつものである。即ち亂の勃發とともに西北方面の唐の諸軍隊は鎮壓のために中原方面へ移動したが、その故に西方には大きな間隙が生じ、その間隙に乘じて北方のウイグル族や西方の吐蕃は一段と從來にましてその勢力を擴大發展させた。就中吐蕃は以前から唐の邊境軍隊とは激烈な戦闘を交えており、その勢力擴張に力を注いでいたが、この亂を好機とし隴右、河西方面を手中に收め、遂に廣徳元年（七六三）には唐の首都長安に侵入し、短時日ではあるが傀儡政權を樹立した。異民族が首都まで侵入したのは唐一代を通じて唯一度吐蕃の場合があるのみで、他にその例を見ない。當然このことは當時の人心に非常な衝動を與え、いずれの史書にもその前後の事情は詳細に記述されて、讀むものに一種凄壯の感を催さしめる。一方このことはチベット側にも特筆大書さるべき事件で、テプテルゴンポ *Deb gter sion po* などチベットの代表的史書には、古代王國

吐蕃の長安侵入について（佐藤）

の誇るべき勝利としてその記録が残されている。即ちチブズン (Ka shu) には、

その年 (手黄 chu pho stag 七六三) にズンズン Dsun dsun (= 肅宗) の長子タイズン Thahi dsun (= 代宗) は王位に即けり。そののち、チベットの軍隊は侵入して「タイズンは」シンチュ シンチュ (= 陝州) に逃れたり。チベットの人人はシナの大員コウヒ Koku hi (= 高暉) を王位に即けたるも、間もなくタイズン王は彼を殺したり。

とあり、音韻轉寫について、または事實について若干の誤りは含んでいるが、年代は完全に一致している。

當時はチベットではチンデツェン王 Khri sron lde brtsan の治世で、この長安侵入は王の最大の武功の一つであり、チベット佛教の基礎を確立した事跡とともに後世のチベット人の讃嘆してやまないところである。しかし記録としては右の記事が残っているだけで、これでは到底事實を明確に決定する材料とはなり得ない。中國側の文獻はその點頗る詳細に當時の吐蕃軍の行動を述べているが、それはあくまで中國側から見た記録で、吐蕃の内部の事情は全くそのうちに含まれていない。首都を占領されると言うことは重大事件であり、非常な混乱があつたことは無理もないが、そのためか記録は完全に一方に偏っていて、例えば敵方の司令官の正確な名さえ一向中國側には残されていない。そこで我我はこの問題に關し一つの障害にうち當るのであるが、この空白にチベット側の重要史料であるいわゆるポタラ碑文及び吐蕃年代記が登場してその内情を相當明らかにする。

そのうちポタラ碑文は既に英國のワッデル Austine Waddell の紹介によつてその存在は學界に知られている。彼は一九〇三—四年のヤングハズバンド Francis Younghusband のラサ遠征に軍醫として参加し、ポタラ宮殿の前にこの碑を實見したのである。そして苦心慘澹その鈔寫 eye copy をとり、その翻譯と注釋を付して、唐蕃會盟碑の研究とともにこれを學界に公表した^①。彼の結論は、この碑文はチンデツェンの時代にタグラルユン Sag sgra klu khon という大臣がおり、それが軍を率いて長安に侵入したことを述べたものであると言うのである。この結論は今以て大體において誤つていない。

しかし遺憾なことには彼の發表したテキストはきわめて信憑性の薄い、學的價値の低いものであつた。と言うのは同時に發表された唐蕃會盟碑文のテキストは非常に轉寫の誤が多く、従つてその譯文、注釋とも使用に堪えないものであり、そのことは必然的に同一の條件下にあつたポタラ碑文も恐らくそのような不完全なものであることを豫想せしめたからである。果してベル Charles Bell が後に發表した譯文はワツデルのそれとはかなり異つたものであり、我々の豫想の誤らなかつたことを實證したが、このベルの譯文にはこれ又残念なことにはテキストが付されていない。また固有名詞も皆音寫されていてチベット本來の綴字を全く用いておらず、根本史料として使用することは不可能なものである。尤もベルはそのテキストの出版は考慮していたらしいが遂にそれは彼の在世中には實現せず、遺稿は英國官吏としてチベットに駐在したリチャードソン氏 Hughes F. Richardson の手に委ねられた。第二次大戰後リチャードソン氏はベルの原稿を整理し、自らも在藏中寫眞を多く撮り、注意深い轉寫と研究とを加味して唐蕃會盟碑の研究とともに發表した (AHEL)。

リチャードソン氏はこの碑をその地名に因み、「シヨル碑」Shol rdor rins と呼んでいるが、その碑文の詳細は氏の研究に盡くされているから今ここに新しく繰返す必要はあるまい。唯概括的に簡単に紹介すると、碑文は四面のうち東、南、北の三面に記されており、チベット綴字は必ずしも正確ではなく、會盟碑よりは一段と古い時代のものであることを示している。その内容は、

- 一、東面はタグラルユン Stag sgra ku khon なる人物が内相 Nan blon chen po に任命され、王事に盡瘁して功績のあつたこと、
- 二、南面はタグラルユンがチンデンツェンの時代に側近の有力者となり、シナ征服の司令官として非常な軍功を立てたこと、
- 三、北面にはタグラルユンの功勞についてチンデンツェンはその子孫に對して種種の特典を與えたこと、

を述べており、當時の吐蕃側の實情を知る極めて貴重な史料であることを示している。リチャードソン氏の研究は碑文そのものについての考察であり、中國側の史料はバッシュェル S. W. Bushell の新舊唐書吐蕃傳の翻譯^①を利用する程度であるので歴史的研究としては甚だ不十分なのを免れない。いま本論文はこの重要な史料を利用し、中國史料を整理して事實の再構成を行ない、そのような從來不十分な點を補つて、チベット史の一頁に若干の寄與をするのをその目的とする。それにしても極めて不便な異境にあつて、なおこの貴重な史料を探查し提供されたリチャードソン氏に對して、我我は更めて深い感謝と敬意を捧げねばならないであろう。

一一

さてチソンデツェンは古代チベット史では三大護教王の一人であり、吐蕃全盛時代の基を開いた名君とされているが、その即位は必ずしもスムーズに行なわれたものではない。基本的な中國史料によれば、

天寶十四載、贊普乞黎蘇籠臘贊死、大臣立其子娑悉籠臘贊爲主、復爲贊普（舊傳）。

是歲（天寶十四載）、贊普乞黎蘇籠臘贊死、子娑悉籠臘贊嗣（新傳）。

天寶十四載、贊普乞黎蘇籠臘贊死、大臣立其子娑悉籠臘贊爲贊普（冊府元龜卷九六六外臣部繼襲）。

とあり、資治通鑑にも天寶十四載にかけて、

是歲、吐蕃贊普乞黎蘇籠臘贊卒、子娑悉籠臘贊立。

とある。すべて同一史料から出た記述であることは明らかであるが、このことは果して事實として認定できるものかどうか。これについての解答は前に觸れたことがあるので、一一ここに詳細は述べないが、その結論は、

一、ポタラ碑文と對照して天寶十四載（七五五）に立つたツェンボはチソンデツェン^②乞黎蘇籠臘贊であつてサ（又はバ）

ソンデツェンではない。

二、このとき唐では弔祭の使者を吐蕃に送つてゐるが（後述）、その使者が歸つてきたときは安史の亂が勃發してゐたからツェンポの交代に關する報告は混亂してサンデツェンと言う奇妙な王名を残したのであろう。

と云ふことであつた。右の結論は今においても大體變わることはないが、實は混亂の責任の一半はチベット側の内部事情にもよつていたと思う。即ちボタラ碑文 (S. I. 1. 1. 30) によれば (MILLER, p. 167-15) :

ツェンポ、チデツクツェン *Btsan po Khri lde gtsug rtsan* の御代にゲンラムルモン *Nian lam klu khon* は側近の諸事をなすものとなれり。バルドンツァブ *Ihbal ldon tsab* とランニェシグ *Lan nyas zigs* は大論の務をなしたりしが反抗的となり、ツェンポ父君チデツクツェンの御身に危害を加え「ツェンポは」天に逝きたまえり。「彼等は」ツェンポ御子チソンデツェンの御身にも危害を加えんと近より、黒頭のチベット國は鬭争の状態に陥りぬ。よつてルモンはバルとランの反抗の始末をチソンデツェンに上聞し、バルとランの反抗は實證されて彼等は罰せられ、ルモンは側近に侍することとなれり。

とあり、バルドンツァブ、ランニェシグなどの重臣のためにチデツクツェンは弑せられて、チソンデツェンがその後を嗣いだ事情が明らかにされる。バルドンツァブについては吐蕃年代記 (大妻博物館藏 *De ge shi* (157)) 猿の年 (七四四) の條には (DRIE, p. 33) :

冬の集會はキシヨマヲ *Skyi go ma ra* において大論チユンサン *Cun bzän* とバルドンツァブ二人によりて催されたり。とあるのが初見で、犬の年 (七四六) の條には (DRIE, p. 33) :

〔冬の〕集會はキシヤルリンツェル *Skyi Bya rin tsal* に大論チユンサンとバルドンツァブとランニェシグ三人によりて催されたり。

とあり、翌豚の年(七四七)の條にも (ibid.)、

冬の集會はラのツェロ Drahj Rtsé gro に〔大〕論〔チュン〕サンとバルドンツァブとロンマンボシエ Blon man po rje とシャンリンツェン Shan hbrin rtsan らによりて催されたり。

とあり、この頃より吐蕃の最高幹部として活動したことが明らかである。吐蕃編年記の宰相表によると (PTH. p. 102)、

そののちバーのタグラコンロエ Dbahs Stag sgra khon lod 大論となれり。批難せられてロのチュンサンオルマン Hbro Cui bzai hor man [大論と]なれり。そののちバルのギェサンドンツァブ Hbal Skye zai ldon tsab [大論と]なれり。ギェサンドンツァブ批難せられてバーのナンシエルスツェン Dbahs Snai bsher zu brtsan [大論と]なれり。

とあるが、タグラコンロエは名將としての譽高く、その故に開元十六年(七二八)にチデツクツェン王によつて誅殺され、^⑥後はチュンサンオルマンがついでるのである。チュンサンの後を何時バルギェサンドンツァブがついだかは遺憾ながら年代記が七四七年末より七五五年の初まで失われており決定できないが、七四七年以後であることは誤りないところであろう。續いて年代記の羊の年(七五五)の條には (PTH. p. 36)、

御父 yab の近侍者らは軍隊によつて破られたり。トンサル Ston sar の三つの千戸の千戸長任命せられ、ラン、バル Lan lbal の従者は追放せられたり……處罰せられしラン、バルの資産は調査せられたり。

とあり、ラン、バルは明かにランニェシグとバルドンツァブの略であるから、この年には既にバルドンツァブは大論の位より却けられていたのである。右の文に「御父の近侍者云云」とある前の部分は全く缺失しているが、この時代の文例から見ればその前には當然「ツェンポ」がある筈で、勿論「ツェンポ御父」Btsan po yab はこの場合チデツクツェンを指している。軍隊によつて破られた近侍者のうちにはバルドンツァブもランニェシグも含まれていたであろうが、破つた軍隊は後のチソンデツェンハいてはタグラルコンの興黨であるに相違ないのである。

チデツクツェンの弑殺については右にあげた史料以外には依るべきものがない。しかしその年代については逆にチソンデツェンの繼承の年次を定めることによつて推定できるであろう。チソンデツェンの誕生については年代記の馬の年（七四二）の條に (DTH. p. 50)

ツェンポ、ソンデツェン Sron lde brtsan ラグナル Brag nar にて生れたまえり。御母マンモシエ Man mo rje はみまかりたまいぬ。

とあり、プトン佛教史 (125c) には、戊午の年 sa pho rta にチソンデツェンが生れたことを言っている。戊午の年が壬午の年 chu pho rta (七四二) の誤りとすれば、これは完全に年代記の馬の年に一致する。プトン (125c) には更に、

チソンデツェンは十三歳過ぎて王位に即けり。

とあり、計算すると七五四年（天寶十三載）が彼の王位を踐んだ年次となる。恐らくこの年にチデツクツェンは死し、チソンデツェンが後をついで立つたのである。ただし年代記の猿の年（七五〇）の條には (DTH. p. 50)

夏にツェンポはスカル Nun kar に住せり。ツェンポの御名はチソンデツェン Khri sron lde brtsan と稱せられたり。政權を御手にとられ、四方の民に多くの賦税をかけられたり。

とあり、正式に彼がツェンポの位に即いたのは二年後に當る。この二年の間にツェンポの交代について混乱と動搖があり、その鎮壓に若干の時日が必要であつたことが窺い得られる。舊傳によると天寶十四載のツェンポが新に立つたことを述べた條に、

玄宗遣京兆少尹崔光遠、兼御史中丞、持節賞國信冊命、弔祭之、及還而安祿山已竊據洛陽。とあるが、舊唐書 卷二二二 崔光遠傳には、

十四載、遷京兆少尹、其載使吐蕃弔祭、十五載五月使廻十余日、潼關失守、玄宗幸蜀。

とある。姚汝能の「安祿山事蹟」卷下(學海類編所收)には潼關の失守を六月十四日辛卯としているから、これより十余日以前で五月以内とすると崔光遠の歸來したのは五月末とすることになる。彼が使に出發したのはツェンボ逝去の通知が到來してからであるし、この間の時間的な経過は天寶十三載にツェンボの逝去をかければ全く矛盾がなくスムーズに理解できる。結論すれば事實は、

一、天寶十三載(七五四)にチデクツェンが死しチソンデツェンが立つた。

二、玄宗は弔祭使として崔光遠を十四載(七五五)に遣わした。

三、しかし吐蕃には政局不安があり、チソンデツェンが即位式を行つて公式の稱號を稱したのは至徳元載(七五六)であつた。

四、崔光遠は天寶十四載十二月以前に出發し、十五載五月に本國に到着した。

とすることになる。そこで先にあげたツェンボの交代に關する中國文獻の記述は、この間の事情を明確に把握せず記録の上で混亂した形を残したものと考えるより他はない。

チデクツェンが父王チドゥソン *Khri lduus sron* の戦死に會い、その後をついだのは生れて未だ一年にも満たないときであつた。彼は祖母の愛情によつて成長し、七歳のときに金城公主を迎え、九歳にて正式に即位した⁽⁷⁾。それらの事實よりすれば彼がバルドツァブ、ランニェシグの陰謀により非業の死を遂げたのは五十一歳のときであつたことになる。

彼をついだチソンデツェンも決して幸福な繼承者ではあり得なかつた。位に即いた十三歳と言う年齢はチベット人としては近代文明人程の幼少さではないが、しかし成人と言う年齢に到達した程でもない。しかも母のマンモジェは彼を生むと間もなくこの世を去つている。マンモジェは吐蕃王統記に (*DBT. p. 31*)

チデクツェンとナナム氏マンモジェシテン *Sna nam zah Man mo rje bshi sten* との間に生れし御子はチソンデツ

エン。

とあるにより、吐蕃の有力氏族ナナムの系統に屬する女性であることが分かる。プトン(པོ་ཏོན)には、

彼女(金城公主)に相よき御子、戊午の年 sa pho rta に生れたまいしが、王のバンタン Iphan than に教法のため出發せる折、御子は妃ナナム氏 Sna nam bzah に連れ去られてナナムの子となされてチソンデツェンと稱せられたり。

とあつて、彼が幼少のときナナム氏で養育されたことを傳えている。プトンはチソンデツェンが本來金城公主の子であることを言うのであるが、公主は七三九年に歿しており、チソンデツェンは七四二年の生れであるから、この説は成立しない。パマタンイグ Pad ma than yig もやはり彼を公主の生んだ子とするが、同様な誤りと見るより他はない。プトンの記載は信頼できないが、とにかく諸種の史料から見るとチソンデツェンの幼年時代から即位にかけては、即位後の事跡の華やかさに比して、暗い複雑な事情があつたことは否定できないのである。

三

さてチソンデツェン時代の唐、吐蕃の政治的軍事的交渉が如何であつたかを述べる前に、チデックツェン時代の末期の狀勢に簡単に觸れておきたい。開元二十七年(七三九)に金城公主が逝去するまでの兩國の關係については別稿において論述したのでここでは更めて述べない。その後は開元二十八年(七四〇)に安戎城が唐の手に奪回され、劔南方面の作戦は成功した。二十九年(七四一)には石堡城が吐蕃の手に陥り、天寶七載(七四八)に漸く唐はこれを奪回して隴右方面の作戦を完遂した。唐のこれらの一連の作戦は玄宗自身が積極的に計畫に参加し、吐蕃は東境に關する限り完全に要衝を制壓されて高原に封じ込められた。一言以て言えば唐の吐蕃に對する壓力は天寶中期にはもはや決定的であつたのである。

吐蕃の長安使入について(佐藤)

天寶十四載に蘇毗 So byi の王子悉諾邏 Stag sgra が吐蕃を去つて來降し、懷義王に封ぜられ（新傳）、名を李忠信と賜わつたが（通鑑同年正月、四月の條）、唐の封じ込め作戰の成功とツェンボ交代のときの混亂がこの結果を生み出したものと考えられる。悉諾邏の來降の事情は冊府元龜 卷九七七外臣部降附 天寶十四載正月の條に記載せられた哥舒翰の上奏文が委細を盡くしている。

蘇毗一蕃最近河北吐澤部落、數倍居人、蓋是吐蕃舉國強授軍糧兵馬、半出其中、自沒凌替送款、事彰、家族遇害二千余人、悉其種落、皆爲猜阻、今此王子又復歸降、臨行事洩、還遭掩襲、一千余人悉被誅夷、猶獨與左右苦戰獲免、且吐蕃、蘇毗互相屠戮心腹、自潰滅亡可期、但其王逆歸仁、則是國家盛事、伏望宣付史。

蘇毗は入吐蕃道に沿うチベット系の部族で、新傳に「蘇毗疆部也」と記されるごとく、吐蕃支配下では最大の勢力を持つものであつた。

安祿山の亂は同じく十四載に起つたが、この亂は兩國の拮抗關係に決定的な影響を齎らした。安祿山の討伐のために河東、朔方の軍がそれぞれ李光弼、郭子儀に率いられて出動したが、隴右河西の軍も哥舒翰に率いられて潼關に進撃した。尤も哥舒翰は當時病氣で長安に歸つていたが、舊唐書 卷一九一 金梁鳳傳によると、

金は天寶十三載河西におり裴冕に會つたが、そのとき哥舒翰は京師に入り、裴冕は祠部郎中となり河西留後を知して武威にいた。

とあるから、このとき哥舒翰は河西隴右をなお領していたのである。又通鑑考異は肅宗實錄を引いて、

翰は河隴朔方の募兵十萬と高仙芝（前司令官）の舊卒を合して二十萬を率いて潼關に拒いだ。

と言ひ、安祿山事蹟 卷中（學海類編所收）には、

哥舒翰は河隴諸蕃部落、奴刺、頡跌、朱耶、契丹、渾、蹄林奚結、沙陁、蓬子、處密、吐谷渾、恩結等二十三部落蕃

漢兵二十一萬八千人を領して潼關に鎮した。

とあるから、河西隴右の軍隊が實際に動員されたことは事實と見て誤りない。

玄宗が至徳元載六月に馬嵬を發して四川に向おうとするとき、皇太子の亨はいずれに行くべきかに迷つたが建寧王倓は李輔國とともにここに止まることを願ひ、西北守邊の軍を收めて郭、李を河北に呼び合體して東進することを上言している。太子亨は七月に靈武（寧夏省寧夏縣南）において位に即いて肅宗となつたが、命によつてその月のうちに河西節度副使李嗣業は兵五千を率いて行在に到着し（舊唐書卷二二八、新唐書卷一五三段秀實傳）、殆ど同時に安西の行軍司馬李栖筠は精兵七千人を發して國難に赴いた（通鑑）。同年十二月にはコータン王の尉遲勝がその弟曜に國事を委ね、自ら兵五千を率いて救援に來り（舊唐書卷一四四、新唐書卷二一〇尉遲勝傳）、翌二載正月には肅宗は保定（涇州安定郡―甘肅省涇川縣）に進んだが、その理由は安西、北庭、フェルガナ、タージの諸國の兵が涼、鄯二州に到着したのを聞いたからであつた（通鑑）。同年の九月には肅宗の弟廣平王俶（後の代宗）が元帥として朔方、安西、ウイグル、南蠻、タージの衆二十萬を率いて東方に進撃を開始した（新舊唐書本紀、通鑑）。これらのことは中央アジアの諸軍隊までが戦闘に参加したことを物語り、隴右、河西の軍が東方に移動したことは大局から見てもはや當然のこととしなければならぬ。

尤も前に述べたごとく至徳元載六月に太子亨が馬嵬で次の行動を決しかねていたとき、建寧王倓は又朔方に赴くべきことを薦め、その理由に、太子が曾て朔方節度大使であつて舊知が多いことと、

今河西隴右之衆皆敗降賊、父兄子弟多在賊中、或生異圖。

ことをあげている（通鑑）。このことは一見如何にも河西、隴右の軍隊が甚だ數多く又迅速に中原に作戰し敵の手中に陥つたかのような印象を與えるが、誤解を招きやすいので事實をここに明らかにしておきたい。即ち朝廷ではさきに哥舒翰が病氣を理由に従軍を固辭したのを許さず御史中丞の田良丘を行軍司馬としてこれに屬せしめた。哥舒翰は病氣の故もあつ

て軍政を田良丘に委ねたが、田良丘も又專決することをせず、軍を二分してその騎兵部隊を王思禮の支配下においた。^(四)ところが至徳元載の六月に哥舒翰は部下の蕃將火拔歸仁の反叛で、結局安祿山に降服のやむなきに至つた。王思禮は金城縣で都落ちの玄宗の一行に會つて潼關の失守を報告したが（安祿山事蹟卷下）、朝廷では急遽哥舒翰に代つて王思禮を河西隴右節度使として鎮に赴かせ散卒を集めて東討させることにした^(五)（通鑑同年六月乙未の條）。このときの潼關における哥舒翰軍の實情がよく朝廷に把握されていなかつたために建寧王の右の言葉が出るのであるが、事實は少しく相違していた。通鑑至徳元載六月の條には、

王思禮至平涼、聞河西諸胡亂、還詣行在、初河西諸胡部落、聞其都護皆從哥舒翰、沒於潼關、故爭自立相攻擊、而都護實從翰、在北岸不死、又不與火拔歸仁俱降賊、上乃以河西兵馬使周泌爲河西節度使、隴右兵馬使彭元耀爲隴右節度使、與都護思結進明等俱之鎮、招其部落、以思禮爲行在都知兵馬使。

とあり、建寧王の言葉の中の「河西隴右之衆」と言うのは思結フシツ（九姓鐵勒の一姓）などの名から想像できるように、則天武后のとき回紇、契苾、渾の三部とともに甘涼の間に遷つた（新唐書卷二七上回鶻傳上）北方遊牧民の一派を指しているのである。従つてこの事實からは河西、隴右の唐軍が「皆敗降賊」したと言うことは結論できないことになるであらう。

四

河西、隴右の地方が空虚になつたことは必然的にこの方面において封じ込められていた吐蕃を積極的に軍事的活動へ誘う原因となつた。新傳には、

潼關の守備が破れて黃河、洛水の線で敵（安祿山）を防禦することになり、ここに河西、隴右、朔方の將軍をすべて召集し、軍を統率して國難の平定に赴かせた。これを行營と言う。「こうして」さきの本來の軍營と邊境の諸州には

防衛の備えがなくなつた。乾元の年〔七五八—九〕以後は吐蕃はわが方の間隙に乗じて日に日に邊境の城にせまり、あるいは掠奪殺傷をうけ、あるいは溝や谷に轉死し、數年の後には鳳翔の西、邠州の北はことごとく蕃人の領域となつて數十の州が姿を消した。

とある。至徳元載の八月に吐蕃のツェンボはウイグルのカガンと相ついで使を遣わし救援の軍隊を送ることを申し出た（舊唐書肅宗本紀、冊府元龜卷九七三外臣部助國討伐、通鑑）。ウイグルには翌九月に邠王守禮の子承宋を敦煌王として和親のために遣わしたが（舊唐書肅宗本紀、通鑑）、目的は勿論ウイグルの援兵を求めることであり、承宋はフェルガナの兵をも發し、城郭諸國にも厚賞を以て報いることを諭し、安西の兵に従つて入援することを慫慂した（通鑑同年九月の條）。このとき唐朝が同様に吐蕃に向つて援助を求めることをしなかつたのは彼等に信頼をおいていなかつたからであらうが、恐らくこのことは後のウイグルの唐における厚遇と併せ考えて吐蕃の感情を相當害したものであつたと思われる。

劍南方面については通鑑同年九月の條に、南詔が亂に乗じて越嶲會同軍を陥れ清溪關によつたことを傳えるが、通鑑考異には、

唐曆、是月吐蕃陷嵩州。

とあり、南詔の背後には吐蕃があつたことを示している。年代記猿の年（七五六）の條には（D.H. p. 56）

ロンチブサン Blon khri bzau とシャントンツェン Shan ston tsaun とカグラボン Kag la bon 三人は軍を率いてセチ
H Se cu (嵩州?) を破り、ツェチ Tse ci まで征服せり。

とあつて、これに一致すると思われるが、ロンチブサン、シャントンツェンは後の長安攻略にも從軍した吐蕃の闘將であり（後述）、カグラボンは「閣邏鳳」Kak la b'ing で南詔王の名である。新唐書本紀同年末にも、「是歲」の事件として明確に、吐蕃陷嵩州。

吐蕃の長安侵入について（佐藤）

とあるのも同一事件を指していることは誤りないところである。隴右方面では時日は明かでないが、やはり同年のこととして通鑑は、吐蕃が威戎、神威、定戎、宣威、制勝、金天、天成の諸軍と石堡城、百谷城、彫巢城を陥れたことを言っている。

新傳至徳二載〔七五七〕の條には、

使使來請討賊、且脩好、肅宗遣給事中南巨川報聘。

とあり、冊府元龜卷九七三外臣部助國討伐同年二月の條にも吐蕃の「請助討賊」のことを伝え、同じく卷九七九外臣部和親第二には同年のこととして南巨川を遣使したことを述べているから、吐蕃が救援を押し売りし、それに對して唐側では極めて溫和な態度に出ていることが明かである。舊唐書肅宗本紀にもほぼ同様の文が三月癸亥にかけられており、唐會要卷九七吐蕃同年同月の條にも同様の記事がある。年代記には鳥の年（七五七）のこととして(D.H. p. 57)、

夏にツェンポの宮廷はババムのヤルゴン Ba bans syi Gyags ru son にあり、シナの使者は敬意を表し來れり。

と言うが、時期的に見てこの使者は南巨川を指しているものに相違ない。

和戰兩様の交渉を以て吐蕃は漸次唐を壓迫してゆく。二載（七五七）の十月には西平郡（鄯州）を陥れ（新舊唐書本紀、通鑑）、翌乾元元年（七五八）には河源軍を陥れた（通鑑同年末の條）。上元元年（七六〇）には廓州が陥落したから（新舊唐書本紀）、青海山脈の南北の唐の據點はとも失われたことになる。これについて新傳は南巨川の報聘に次いで重要な記述をなしている。即ち、

〔一方吐蕃は〕年ごとに内部に侵入して廓、霸、岷などの諸州と河源、莫門などの軍を占領した。そして使者はしばしば來て平和を願つた。帝（肅宗）はその詐りなのをよく知っていたが、暫くの間できるだけ災を緩めようと思つて、宰相の郭子儀、蕭華、裴遵慶らに詔を下して〔吐蕃と〕盟約させた。

とあり、これに對應する舊傳の記載は、

肅宗の「寶應」元年（七六二）建寅の月の甲辰の日に吐蕃は使者を來朝させて講和を願つた。「そこで」宰相の郭子儀、蕭華、張遵慶^{裴?}などに勅を下して中書省に宴會を開き、それより光宅寺に行つて盟をし、三匹の犠牲獸の血を飲ることにした。「しかし」寺院に行つて盟をすると言ふことは「今までに」ないことであつたので、明日鴻臚寺において血を飲り、そして更に蕃人の儀禮をも重ねて行なうことを願つて許可が下された。

とあり、冊府元龜 卷九八一外臣部盟誓 にも宰相の名はあげてないが、ほぼ同様の文が見え、又同書 卷九八〇外臣部通好に、「吐蕃が來朝して和を請うたので宰相郭子儀、蕭華、裴遵慶らに中書省で宴せしめた」とある。新唐書本紀及び通鑑の同月同日の條には「吐蕃が和を請うた」と簡単に記してあるが、事實は右のごときものであつたのである。ところでこの時の盟約の内容については全く中國史料に手がかりがない。ただチベット史料のポタラ碑文 (S. 1. 41-49) ⑫ (AHIL. p. 17-18) ⑬

ツェンポ、チソンデツェンは深慮あり、優れたる勸告によつて、政治につきてはなしたることすべてよろしく、シナの領域に屬せる多くの國の城塞を征服し收めたり。シナ君主ヘウキワンテ Hehu hi wan te ⑭ は君臣ともに恐れ、年ごとに常に貢物として絹、織物五萬を捧げ、シナは貢物を支拂わしめらるることとなれり。その後シナ君主御父ヘウキワンテは逝き、シナ君主御子ワンペンワン Wan pen wan 王としてありしが、チベットに貢物を支拂うこと能わず、ツェンポ御心を惱せし折、

とあるのみである。肅宗は乾元元年正月に光天文武大聖孝感皇帝の尊號をとり、同二年正月、上元二年九月には多少この尊號を變えたが孝感皇帝の名は續いてそのまま用いた^⑮ (新舊唐書本紀各年月の條)。文中のヘウキワンテが孝感皇帝 Yau K'an Yang t'ei の訛つた形であることは疑いない^⑯。ワンペンワンは廣平王 K'ang ping wang の音寫で、肅宗の子叔、のちの代宗皇帝を指している。Wan pen wan は音寫としては不正確で、リチャードソン氏が注意する^⑰とく I. 61 の Kwan

pei wan が正しい綴字と見なければならぬ (AHEI, p. 23)。

この碑文では明かに肅宗のときに歲賜の盟約がなされたことを言うが、一方年代記虎の年(七六二)の條にも(LTH, p. 59)、「晩冬シナの君主は逝きて、シナの君主新に立ちたり。絹の貢物と地圖など獻上すること能わず、〔シナの〕國家は崩壊せり。」

とあつて、その事實は裏書きされている。ただチベット側の史料には盟約の行なわれた年代が明記されていないので積極的に斷定することは困難であるが、彼我の狀況を考え合せてこれを寶應元年(七六二)の盟約の内容と見たい。

しかし當時の唐朝が吐蕃に與える多くの歲賜を準備することは内外の狀勢から見て困難であつた。碑文の傳えるこの約束は唐朝では到底守り得なかつたので、むしろ吐蕃としては絶好の侵略の口實をここに捉えることができたのである。舊傳には、「同年六月に吐蕃は燭番莽耳ら二人に貢物を持つて入朝させ、天子は延英殿に引見して賜物を與えた」とあるが、これは一應和平のポーズをとつただけで、眞實吐蕃が和平を心から願つていたかどうかは頗る疑問としなければならぬ。即ち舊唐書 代宗本紀 及び新傳の寶應元年の條には「是歲」のこととして、

吐蕃陷我臨洮、秦、成、渭等州。

とあり、新唐書 肅宗代宗本紀の同年の條にはやはり「是歲」のこととして、

吐蕃寇秦、成、渭三州。

とあつて、早くも吐蕃軍の侵寇を傳えているからである。その時期は明確でないが、對應すると思われる年代記前掲虎の年(七六二)の條には(DTH, p. 59)、「引續して、

シヤンギェルシツグ Shan rgyal zigs' シヤンテンツェン Shan ston tshan 及びゾムリンの鐵橋 Bum lin leag zam を横切りて攻撃をかけた^⑤。プシントン Hbu gin kun' シンチュ Zin cu' ガチュ Ga cu' などシナの多くの城塞は破られ

たり。

とある。ブシントンには新唐書 卷四〇 地理志、隴右道廓州の條に、廓州より、

西南百四十里洪濟橋、有金天軍、其東南八十里百合城、有武寧軍……皆天寶十三載置。

とある武寧軍 **biu nieng kuan* であろう。元和郡縣圖志 卷三九 隴右道上廓州の條には、治下の各軍とともに、

武寧軍在洪濟橋東南八十里百谷城……並天寶十三年哥舒翰奏置。

とあり、哥舒翰の決定的な作戦の後に置かれた唐の最前線であることを示している。ただ「寧」を *ciu* で寫すのはいささか疑問がもたれるが、恐らくチベット字 *na* と *ca* の字形の類似より轉寫の際に誤られたのであろう。シンチュは秦州 *dzien tsiau* であり、ガチュは河州 *ya tsiau* と見て差支えあるまい。従つてこの記事は當然漢文史料の裏付をなしているもので、吐蕃の大規模な作戦行動がいよいよ開始されたことを示している。

この侵入は盟約の年の事件であるが、時期は恐らく盟約の行なわれた後であらう。それにしてもその迅速さは歲賜の約束を守らなかつたと言う理由はともあれ、唐の難局につけこんだ豫定の行動であつたとしか考えられない。年代記によれば (DTH. p. 53) この年の春の集會は一箇所でありそれは一回だけのものと思われるが、夏の集會は三箇所で行なわれており、チベット各地で軍隊が編成されたことを暗示している。續いて前掲のシャンギェルシグ、シャントンツェンの東方進撃が述べられて、この年の吐蕃の行動は一連の連關性をもつたものであり、中國の文獻が與えるような斷片的な事實とは全く異つたものである。

五

作戦の秘匿のためか、翌寶應二年三月には吐蕃は唐朝の遣わした使者、左散騎常侍御史大夫の李之芳と太子左庶子兼御

史中丞の崔倫を國境に止めて（新舊傳、冊府元龜卷九八〇通好）入れず、軟禁状態においた。^⑩尤も通鑑廣徳元年夏四月の條に、

郭子儀數上言、吐蕃党項不可忽、宜早爲之備。

とあるところを見ると、吐蕃の作戰開始は郭子儀などには早くから察知せられていたらしい。軍事行動は繼續し、翌廣徳元年七月には吐蕃は蘭、河、鄯、洮などの隴右の諸州を陥れ（新唐書本紀、新傳）、邊將は急を告げたが、當時朝廷に勢力を振つた宦官程元振は皆これを押えて上奏しなかつた。九月二十日には涇原が陥れられ（通鑑注段公家傳）、涇州刺史の高暉は敵に降り、遂にその嚮導となつて十月には邠州に至つた。天子が入寇の事實を知つたのは漸くこのときであつたと言ふ（通鑑）。吐蕃は更に進んで奉天縣、武功縣に至つたから、人心は動搖し、朝廷は狼狽して、雍王适を關内元帥とし郭子儀を副元帥として咸陽に出てこれを防禦させることにした（舊唐書卷二二〇郭子儀傳）。しかし郭子儀はこの年の八月に河東より入朝して長安にとどまつていただけで、部下を手許にもたず漸く二十騎を召募して咸陽に至つた。これに對する吐蕃軍は吐谷渾、党項、氐、羌を合せて二十萬と言ふ大軍であり、延延數十里にわたり、整屋縣の司竹園で渭水を渡り、山に沿うて東方へ進撃した（舊唐書本紀、通鑑）。郭子儀は判官の中書舍人王延昌をやつて増兵を天子に願出たが、この時も程元振に遮られて天子に謁見することはできなかつた（通鑑）。一方渭北行營兵馬使呂月將（新唐書本紀、舊唐書郭子儀傳、通鑑は日將）は精兵二千をひきつれて整屋の西方で戦つてこれを破り、更に終南に戦つたが月將は遂に敗北した（新傳、通鑑）。吐蕃はその勢で便橋を渡つて長安にせまつたから代宗は急に陝州（河南省陝縣）に蒙塵し、官吏、軍隊はなすところを知らず首都を棄てて逃亡した。郭子儀がこの状態を聞いて咸陽より長安に歸つたときには、代宗は正に苑内を出て澧水を渡り東に向うところであつた（通鑑）。十月戊寅に吐蕃は高暉の案内で首都長安城に入城したが、新唐書卷二〇七程元振傳に記された太常博士柳伉の上言には、

〔吐蕃〕不血刃而入京城、謀臣不奮一言、武士不力一戰。

と述べているから、唐朝の醜態もさることながら、その占領は極めて容易なものであつたらしい。入城後の吐蕃は例によ

つて府庫、市街を略奪し、民家を焼くなど相當の暴行を働いた。通鑑はこの状態を「長安中蕭然一空」と形容し、その徹底した掠奪ぶりを髣髴させている。一方高暉は吐蕃の大將馬重英とともに廣武王承宏を立てて皇帝とし、改元して大赦を行い、前翰林學士の李可封（新唐書卷八一、三宗諸子列傳雍王守禮の條、通鑑は于可封）を相とし、百官を署置して傀儡政權を樹立した。又侍中の苗晉卿が老病で臥していたのを輿をやつて迎えこれを脅迫したが、晉卿は沈黙して一言も發せず暗暗裏の抵抗を示した（新唐書卷一四〇苗晉卿傳）。長安城を出た高官、豪族は皆荊襄地方に逃れ、統一を失つた官軍の兵士も首都を去つて方で掠奪を働き收拾つかぬ混亂が起つた（舊傳）。郭子儀はわずかの手兵とその妻子下僕らを連れ南の方の牛心谷に退避した。彼が行くべき道を決定しかねているのを見て王延昌と監察御史の李萼は、南方商州に行き、それより行在に赴くことを薦めた。しかし大道を通過することは危険なのでやはり王延昌の言に従い、玉山路①を通つて商州に向つた。當時商州には長安から六軍の將張知節が逃れて來、避難している官民や土地の人間から財産、乘馬などを盛に掠奪していた。王延昌は李萼とともに張知節に會い、郭子儀の指揮をうけて功績を立てることを慫慂したが、張知節もその言に従うことにした。都虞侯の臧希讓、鳳翔節度使の高昇のほか彭體盈、李惟先などのおのおの手兵を率いて千人に近い軍兵がここに集結した。王延昌は諸將に行動を共にすることを約束させ、李萼は數騎を率いて郭子儀を迎えに行き洛南より十余里のところまでこれに追いついた。それより同道して商州に歸つたが、諸將は皆その命令に従うことを更めて約束した。一方商州の東方の武關からも援兵が到着し約四千人となり士氣は漸く上つてきた（舊傳、舊唐書卷二二〇郭子儀傳）。陝州の代宗は吐蕃が東行して潼關を突破することを恐れ子儀に行在に直行することを求めたが、子儀は首府を回復することが先決で、それをしないうちは天子の顔を見ることはできない、藍田に味方の軍が進出すれば吐蕃は決して東進しないであろうことを上奏した。折しも羽林將軍の長孫全緒が二百騎を連れて郭子儀に従つたので、子儀は彼を藍田に行かせ敵の行動を偵察させた。長孫全緒は韓公堆に行き、晝は太鼓を打ち旗幟を盛に立て、夜は火を多く焚いて大軍がいるごとく吐蕃に見せかけた。一方これと

は無關係に前光祿卿の殷仲卿が首都を逃れ藍田に來り、千人に近い兵を集めてこの地を信持していたが、間もなく彼は官軍が近くにいろのを探知し、遂に長孫全緒と連絡し、書を郭子儀に送つてその行動を知らせた。而して仲卿は二百餘騎を率いて渭水を渡つたから、吐蕃は不安を感じ、人人の「郭公の軍が來ているが大軍であるからその數は分らない。」という言を信じて退却した。吐蕃は最初から長期にわたつてその軍を長安に駐める意圖はなかつたらしく、通鑑には、

吐蕃既立廣武王承宏、欲掠城中士女百工、整衆歸國。

とその實情を述べている。

城中には未だ吐蕃軍の一部が残つていたが、長孫全緒は射生將の王甫をやつて城中の惡少年數百を集め、夜は太鼓を打つて朱雀街に「官軍至る」と喚聲をあげて歩かせたため、吐蕃は狼狽して速かに撤退した(新舊唐書郭子儀傳)。殷仲卿の軍も入城し間もなく郭子儀の本隊も入城して城内は漸く安靜に歸した(舊傳)。一方吐蕃に降服してその侵入を助けた高暉は吐蕃の長安撤退を聞き、三百の兵をひきつれて東走して潼關に向つたが、守將の李日越に捕えられて殺された(通鑑)。十月壬辰には朝廷は元載を元帥行軍司馬とし、第五琦を京兆尹とし、癸巳には郭子儀を西京留守とした(通鑑)。唐軍は漸くここに首都長安を、吐蕃の占領以來約十五日で回復したのである。

さて長安の陥落から回復までの経過は中國史料によれば右のごとくであるが、このうちには吐蕃の將軍の名は馬重英が一つ見えるだけで他は一向明かでない。この點ボタラ碑文(S. 1. 32-12)は吐蕃側から見た事件の経過とともに我我に絶好の史料を提供する(AHEI. p. 18-19)。

ツェンポ御心を惱ませし折、ゲンラムルコン Nan lam klu khon はシナ國の中心、シナ君主の王庭京師 Pho bran keñ qü に兵を進める勸告の大策を捧げたり。京師に進むべき軍の司令官としてシャンナムギェルギェルシグシュテン Shan Mchims rgyal rgyal zigs çu then とロンタダラルン Blon stag sgra klu khon の二人は任命されたり。京師に

進みてチウチル Cihü cir の渡し場の堤防にシナと大いに戦いて、チベットは「敵を」撃ち退けシナを多く殺したり。よつてシナ君主クワンペンワン Kwan pen ban も京師の城寨より去りて、シエムチュ Ssem chü に逃れて、京師は征服されたり。シナの内大臣ギェウ□ンケン Hgyehü □in ken らはドンカン Don kwan とボカン Bo kan……ツェンボの民……チベットにすべてと……金城公主 Kim gen kon co の兄弟……よりかかりて……大臣………大小の王たち………王國の内部に稱讚の名聲を永遠に轟かせり。

先ずこの碑文内の固有名詞について若干説明しておこう。第一にチウチルはリチャードソン氏の言うごとく整屋 *tiau tjet を指し、その渡し場のところの堤防の上で戦闘が行なわれたことは中國史料を補う新事實である。第二にクワンペンワンは廣平王 K'ang pi'ang j'ang で代宗の即位前の王號であるが、ここでは勿論即位後の代宗その人を指している。第三にシエムチュはリチャードソン氏は Shang chou (商州) とするが、これは明かに代宗の蒙塵した陝州 shan shien を指す。第四にシナの内大臣ギェウ□ンケン は當時侍中であつた苗督卿 miau tsien k'iang を指していると思う。ギェウ hgyehü は hgyehü 又は hnyehü の誤と思われるがリチャードソン氏のテキスト再檢を期待したい。□内のチベット字は當然、c など漢音の tsien の ts に當る文字であるべきである。第五はドンカンは潼關 Tung kan' ボカンは商州の東の武關 b'iu kan の地名を言つていると思うが、Bo kan の kan はチベット字では kwan とあるべきではなからうか。これもリチャードソン氏のテキスト再檢を期待したい。第六に「金城公主の兄弟」なる語については、リチャードソン氏はその譯で、the brother of Kim Sen Kon Co, Gau Iyan と述べ (AHEL. P. 21) ガウワンなる人名を加えている。この名はテキストの方に書きこまれていないところを見ると碑面摩滅のため漸くにして推定できる程度のものであろう。明らかにこれは吐蕃によつて皇帝に立てられた廣武王承宏を指しており、彼は邠王守禮の子であるから金城公主の兄弟に當ることは言うまでもない。碑文のこの行は彼が皇帝にされたことを述べたものに相違ないが、チベット文字 Gau wan は廣武王 K'ang b'iu

ji^wang から推して訂正さるべき文字であり、これ又リチャードソン氏のテキストの再検を期待したい。参考のため編年記の長安侵入のことを記した文をあげると(DTH, p. 114)。

君臣は合議し、シャンチムギェルシグ Shan mchims rgyal zigs らはシナの城塞京師 Kin ts'i を破り、シナの君主グワンブホワンテ Gwan bu hwan te 立てられたり。

とあり、Gwan bu hwan te で廣武皇帝 K'ang *biu r'ang tsei の名を寫している。

右の碑文によつてこのときの司令官がシャンチムギェルシグシユテンとロンタグラルコンであることが明かとなるが、年代記虎の年(七六二)の條には (DTH, p. 60)。

シャンギェルシグ Shan rgyal zigs' ロンタグラ Blon stag sgra' シヤントンツェン Shan ston tshan' シヤントンツェン
ヲ Shan bisan ba たちは京師 Ken ci に攻撃をかけ、ケシ Ke ci を破りたり。シナ君主は逃れ、シナ君主は新に立てられ、攻撃軍は引上げたり。シャンギェルシグは大會議のためにチベットに行きたり。

とあつて、完全に事實が一致する。ただ年代記の文は七六二年(寶應元年)のこととして長安占領を述べるが、その點は誤りとしなければなるまい。しかし七六二年の作戦の結末は當然翌年の長安占領で終るのであるから事實中心に見ればこの記事は反つて吐蕃の作戦の一貫性を裏より證明するものであろう。

六

さて長安を撤退した吐蕃は西方鳳翔に至つたが、節度使の孫志直は城門を閉じて防戦に努めた。數日して鎮西(安西)節度使の馬璘が河西より千餘騎を連れて國難に赴くため到着した。彼は城中に入つたが甲を脱がず、曉方にただ一騎で吐蕃の軍に突入した。左右の行を共にするものが百餘騎あり、猛烈に突撃して斬獲千餘を得て引上げた。翌日吐蕃は城門に

迫つて挑戦したが、馬璘は吊門を上げさせ、その攻撃してくるのを待つた。吐蕃はその大膽さに驚き、反つて退却し、原、會、成、渭の諸州に引上げて行つた（舊傳、通鑑）。

一方行在の方では、郭子儀が長安を回復してより程元振に對する批難は激しくなつたが、程元振も諸將の功を嫉み特に郭子儀の存在を厭つていた。長安に歸れば元振の立場はますます不利なものとなるのは明らかであつたから、彼は洛陽に遷都することを唱導し代宗も一時はこれに賛成した。しかし郭子儀が熱心に長安が重要な王城の地であることを説いたため、代宗は再び長安に歸ることを決意した（新舊唐書郭子儀傳）。車駕は十二月の丁亥に陝州を發し甲午に長安に入つて、この事變はひとまず終つたが、唐朝が郭子儀をはじめとする文武の官に厚く行賞したことは言うまでもない。ただ氣の毒なのは一時的ながら天子とされた廣武王承宏で通鑑廣德元年十二月の條に、

逃匿山野、上赦不誅。

とあるが、新唐書 卷八一 三宗諸子列傳廣武王承宏の條には、

〔代宗〕詔放承宏于華州、死。

とあつて、長安で終りを完うすることはできなかつたようである。

吐蕃側でこの作戦について論功行賞があつたのはいふまでもない。年代記兔の年（七六三）の條には（DTH. p. 63）

チベット國にて大會議行なわれ、大シャロンらは異動を議定せり。（A）大論ナンシエル Snañ bsher はケケルの書 *ke ke ruhi yi ge* を興えられ、〔再び〕大論におかれたり。（B）偉大なるシャングェルシグはトルコ玉の書 *s-yuhi yi ge* を興えられ、ガルシムン ngar hdsi rmun の稱號を許されて賞讃せられたり。（C）ロンチブサン Blon khri bzah は大論にされ、トンツェン Ston tshan はトルコ玉の書を興えられたり。四邊守護の軍指揮官には勅みことのり興えられたり。

とあり、編年記宰相表には（DTH. p. 102）

吐蕃の長安侵入について（佐藤）

ギェサンドンツァブ Skye zan Idon tsab 批難せられ、(a) バーのナンシエルスシェン Dbahs Snan bsher zu brtsan
「大論と」なれり。その後 (c) ゴェのチブサンヤブラ Mgos Kihri bzhan yab lag 「大論と」なれり。その後 (b) チ
ムのシャンギェルシグシェテン Mchims Shan rgyal zigs gu ten 「大論と」なれり。それよりゲンラムのタグラルゴ
ン Nan lam Stag sgra khu son 「大論と」なれり。

とあり、ギェサンドンツァブはバルドンドンツァブのことで、彼が陰謀のため失脚したことは前に述べた通りでここでは問題
ないが、この表で見るとその後の宰相は A Ⅱ a、B Ⅱ b、C Ⅱ c ですべて長安遠征に関する功勞者で占められている。年
代記にはタグラルコンの行賞は出ていないが、これも前述のごとくポタラ碑文 S 面には司令官の一人として明記があり、
N 面には國家の功勞者として非常な厚遇をツェンポより與えられたことが刻み込まれている。尤も碑文に記された功績は、
彼が生涯を通じてのものと思われるが、そのうちには勿論長安遠征の功は當然大きく含まれている。漢文史料の馬重英は
彼此對照すると、このタグラルコンその人ではないかと疑われるのであるが、その比定については別稿に譲りたい。

なお郭子儀軍の長安回復後も實は唐と吐蕃との間には戰鬪が繼續し、局面の安定には若干の時日が費された。しかし紙
數の關係でその經過は次の機會に更めて論述したい。ただこの際、最後に残る疑問は何故にかくも容易に吐蕃が長安に侵
入したかと言うことである。これについては勿論安祿山の亂のため西北邊の防備兵が東方に轉進したと言う事情は大きな
理由となるであろう。しかしその外に唐の朝廷内部にも重要な原因があつたことを忘れてはならない。當時朝廷では程元
振が權力を専らにし、軍將の天子への連絡をしばしば妨げたことは二三例をあげたが、これは單に郭子儀軍の場合のみで
なかつた。新唐書 卷二〇七 程元振傳には、

來瑱等上將、〔裴〕冕、〔李〕光弼元勳既誅斥、或不自省、方帥絲是攜解、廣德初、吐蕃、党項內侵、詔集天下兵、
無一士奔命者。

とあり、舊唐書 卷一八四 程元振傳にもほぼ同様の記事がある。通鑑は長安回復の後に記して言う。

驃騎大將軍判元帥行軍司馬程元振專權自恣、人畏之甚於李輔國、諸將有大功者、元振皆忌嫉欲害之、吐蕃入寇、元振不以時奏、致上狼狽出幸、上發詔徵諸道兵、李光弼等皆忌元振居中、莫有至者、中外咸切齒而莫敢發言。

程元振は太常博士柳伉らの彈劾によつて十一月には官爵を削られ追放處分に付された。結局長安失陥と言う事件は、一官者によつて軍令系統が紊亂され、國家の大事に軍隊が集結しなかつたと言うことが直接の原因であらう。事實間もなく吐蕃は再び長安に迫つたが、このときは諸將の一致した努力により、惡戰苦闘の結果ではあつたが、とにかく首都の地域には彼等の足を踏入れさせなかつた。しかし一連のこれらの事件がいたずらに西北異民族の唐帝國に對する輕侮の念を招きその活動を刺激したことは否定できないところである。少くとも長安の失陥は安祿山の亂について世界帝國が明かにその全盛期を過ぎ、衰退過程に入つたことを我々に如實に示す重要な歴史的事件であつたのである。

註

(1) のちに述べるごとく高暉は涇州刺史で吐蕃に降り、彼等の先導を勤めて長安城を占領させた。王位に即けられたのは廣武王承宏で、唐軍の首都回復後は華州に追われた。高暉は潼關で唐の將軍に殺されたが、承宏は殺されたのではないようである。テフエンのこの文は二人の事跡を混同したものと思われる。

- (2) Waddell, A., *Ancient Historical Edicts at Ihasa*, JRAS, 1910, p. 1248.
- (3) Bell, Ch., *Tibet past and present*, Appendix II, 1927, p. 273—274.
- (4) Bushell, S. W., *The Early History of Tibet. From Chinese Sources*, JRAS, 1880.

(5) 拙稿「西藏文獻の史的價值——吐蕃王統論を中心として——」(下)

吐蕃の長安侵入について(佐藤)

東洋史研究 第十一卷二號五四—五頁。

- (6) 拙稿「金城公主の入藏について」(下)史林 一九五六年第四號六六頁。
- (7) 前掲論文(上)史林 一九五六年第二號七七頁參照。
- (8) 前掲論文(下)史林 一九五六年第四號七四頁參照。
- (9) Toussaint, Ch., *Le diet de Padma. Pad ma thang yig*, Paris, 1933, p. 331, chant I, IV.
- (10) 「金城公主の入藏について」(中・下)。

(11) 拙稿「女國と蘇毗」東洋史研究 第六卷六號 一四、一八頁。

(12) 王思禮は高麗人で、哥舒翰の押衛となつて天寶七載の對吐蕃作戰に參加し、石堡城攻略に功を立てた。その故を以て關西兵馬使兼河源軍使となり、亂の勃發とともに潼關方面に赴いたのである(舊唐書卷一一〇)

王思禮傳)。

(13) ただしこのことが實行されたかどうかは頗る疑わしい。新唐書卷一四七王思禮傳には潼關失陥の後、彼が呂崇實、李承光らとも西走し行在に至つたが、肅宗はその責任を問ひ皆斬らうとした。しかし王思禮のみは宰相房琯の盡力で助けられ、

尋副房琯、戰便橋不利、更爲關內行營節度河西隴右伊西行營兵馬使、守武功。

であつたと傳えるから、彼が河西、隴右に直に赴いたとは到底考えられない。本文に述べるごとく至徳元載六月には早くも別人がそれぞれ河西、隴右の節度使とされている。

(14) リチャードソン氏のチベット文のテキストでは *van* に *han* が當ててあるが (AHEL, p. 18)、氏の譯文には *van* とローマナイズされているから (AHEL, p. 23) テキストの字は誤植と見なしたい。

(15) 右と同じくテキストには *han* とあるが、やはり *van* の誤植と見なす。肅宗は上元二年九月には詔を下して自らを責め、尊號をやめてただ皇帝と稱し、年號の上元もつて年數のみを言うことにしたが、一般には幸感皇帝で呼ばれたであろうことは疑いない。

(17) 感 *kam* が *hki* で寫されているのは理解しがたい。恐らく碑文でチベット字 *ka* の上に *m* を示す圈點 *lad kor* があるのを、字形の類似から、母音符號 *si su* と誤つたのではなからうか。とすればチベット字は *kam* で完全に「感」字を寫していることになるが、これもリチャードソン氏のテキスト再檢を期待したい。

(18) 原文 *da cen dran ste*、トーマス氏 F. W. Thomas は *drew a great network* とするが、いま本文のごとく譯す。

(19) 廣徳二年の五月に李之芳は漸く許されて本國へ歸ることを得た(新舊傳)。

(20) 舊傳には吐蕃は「龍光より渡つて東す」とある。

(21) 陝西省藍田縣の東南三十里に藍田山があり、一名玉山と言うから玉山路はその付近を通る道であろう。

(22) *Kan* についてリチャードソン氏は「長安が何故チベット語のケンシになるのか明かでない」と言っているが (AHEL, p. 26)、疑いもなく「京師」*king shi* の音譯である。これについては曾て述べたことがある(拙稿「西藏文獻の史的價值」(下)東洋史研究 第十一卷二號 六二頁註②)。

(23) *han* は(14)と同じく字形の類似により生じた *van* の誤植であろう。

〔略語表〕

新傳—新唐書卷二一六上・下、吐蕃傳上・下

舊傳—舊唐書卷一九六上・下、吐蕃傳上・下

JRAS=Journal of Royal Asiatic Society.

DTH=J. Bacot, F. W. Thomas, & Ch. Toussaint, Documents de Touan-

honang relatifs à l'histoire du Tibet, Paris, 1940—46.

AHEL=H. E. Richardson, Ancient Historical Edicts at Lhasa and the Mu-

tsung/Khri gtsug lde brtan Treaty of A.D. 821—822 from the Inscr-

ption at Lhasa, London, 1952.